◆書　評◆

中村隆之『はじめての経済思想史：アダム・スミスから現代まで』講談社現代新書，2018年

菊　地　裕　幸（愛知大学）

1.「経済学の本質」と本書のねらい

本書は，アダム・スミス，J.S.ミル，マーシャル，ケインズ，マルクス，ハイエク，フリードマンといった，名だたる7名の経済学者の経済思想を検討するとともに，大胆にもそれらを「一筋のストーリーとして」とらえることにより，経済学の歴史に一つの方向性を見出そうとする，極めて挑戦的・野心的な意欲作である．

タイトルを見てもわかる通り，初学者向けの著作であり，非常に読みやすく，論旨も明快なものとなっているが，扱っている内容自体はかなり高度かつ本格的なもので，しかも著者の問題意識が強く反映されていることから，経済思想史の専門家が読んでも十分に刺激的で読み応えのあるものとなっている．

著者は経済学の本質を「よいお金儲けをできるだけ促進し，悪いお金儲けをできるだけ抑制することで，社会を豊かにしようという学問」とした上で，「どうすればよいお金儲けを促進し，悪いお金儲けを抑制できるか」という経済学の大きな問いはスミスから現代に至るまで変わっていないと指摘する．ただ，時代を経るにしたがって，よいお金儲けのとらえ方，そしてお金儲けの主役が変わってきたのも事実である．スミス以降の「本流」の経済学者達――ミル，マーシャル，ケインズ，マルクス――は，スミスが設定した，お金儲けが「よいお金儲け」であるための道徳的条件が満たされない現実に直面し，条件を回復させるための格闘を重ねてきた――これが著者の考える，経済学の歴史における大きな流れである．

2. 本書の概要

第一章では，本書の出発点にして絶えず立ち返るべき規準となっているアダム・スミスの思想が描かれている．周知のように，スミスは自由競争市場を肯定していたけれども，それと同時に「道徳性」や「公正さ」を忘れなかった．資本主義と道徳性・公正さが両立するためのスミスによる「資本主義の道徳的条件」とは，①自由競争市場がフェア・プレイに則った競争の場であること，特に資本を動かす人間がフェア・プレイを意識する人間であること，②資産を事業に活用するのではなく，貸し出して利益（利子・地代）を得ようとする場合，その行動が資産をよい用途に向けていく助けになり，全体の富裕化を促進すること，③強者が弱者を支配せず，相互利益の関係を結び，弱者の側の能力も活かされること，である．資本家による利潤・利子も，土地所有者による地代も，フェア・プレイ精神のもと，社会全体を富裕に導く限りにおいて正当化され得る．すなわちそれは「よいお金儲け」である．反対に，資本家や土地所有者が自身の儲けしか考えない「利潤獲得機械」となってしまうならば，それは「悪いお金儲け」だと言わざるを得ない．「よいお金儲け」を促進すべく，スミスは公正競争のための規制や貸付資本に関する高利禁止制度の必要性を主張した．また，自由な経済交流は弱者の側に大きな機会を与え，強者と弱者の共存共栄が成り立つ限りにおいて正当化され得る．逆に言えば，お金儲けが単なる弱肉強食になり，弱者を支配の対象としてしまうならば，それには正当性がないということである．これらスミスの3条件は，以後の経済学におい

て「よいお金儲け」や資本主義のあり方を評価する際の基軸となる．

第二章では，ミルとマーシャルの思想が取り上げられる．ミルやマーシャルの生きた19世紀には，労働者階級の貧困問題が前面に出てくる．これは，自由市場がもはやフェア・プレイの競争の場でなくなり，資本家＝事業経営者が「利潤獲得機械」に変質し，スミスの条件（特に①と③）が満たされなくなってしまったことを意味する．このような状況の中，ミルは分配を不変の法則ではなく，人間の人格や機会や成長によって変えられるものとして位置づけ，将来，資本家が労働者をフェアに扱う一方，労働者は自身の能力を成長させるために努力を惜しまない存在となることによりこの問題を克服し得ることを期待した．またマーシャルも，事業経営者の倫理性に期待する「経済騎士道」を唱えた．ミルもマーシャルも資本家の利潤動機自体は否定せず，その行動をフェア・プレイの制約の中に置くことで，スミスの条件回復を目指そうとしたのである．

第三章は，ケインズである．ミルやマーシャルの時代と違ってケインズの時代になると，「お金を持っている人」（資本家）と「お金を実際に活用する人」（事業経営者）との間の乖離が進んだ．このような事態にあっては，経営者にいくら倫理的な対応を求めたとしても，「利潤獲得機械」を行動規準とする所有者（投資家）によるお金儲けは全体の富裕化にはつながらない．ケインズはこのような現実を明確に意識した上で，所有者のお金儲けよりも実業（企業家と労働者）のお金儲けを社会全体の観点から重要視した．またケインズは，「貯蓄は美徳」とする当時の常識に異議を唱え，貯蓄の過剰が有効需要の不足を生み出し，社会全体の富裕化につながらないこと，さらに株や利子で儲けようとする所有者の行動は，目先の利益重視により企業の健全な活動を脅かすものであることを明らかにした．これらの金融によるお金儲けは，スミスの②の条件からの逸脱であり，ケインズに言わせれば「悪いお金儲け」である．スミスの条件回復のため，ケインズは国際通貨制度や適切な金融管理，適切な有効需要の安定化政策など，一連の「ケインズ政策」を提起した．

第四章で登場するのは，マルクスである．著者は，現代においてスミスの条件を回復させるための手がかりが，マルクスの「私有」に関する考察の中にあると主張する．すなわち，マルクスは，お金儲けがフェア・プレイの競争とも社会全体の富裕化とも切り離されて「悪いお金儲け」に変質してしまう根源には「私有」があると考えた．なぜなら，「私有」はその内部においては社会から切り離され好き勝手が許される所有形態であり，フェアな評価という人格的関係とは無縁の「利潤獲得機械」としての側面が前面に出てくるからである．では，そのような「私有」を基礎とする資本主義はどうすれば乗り越えられるのか．そのヒントは，マルクスの言うところの「資本の個人的所有」と「会社の労働者による占有」である．個人的所有（individual な所有）は私有（private な所有）とは異なり，社会的なつながりを前提とするものである．端的に言うと「個人のものだが，同時にみんなのものでもある」ということである．この個人的所有と労働者の占有を基礎とした会社は，資本が労働者に託され，民主的な手続きに従って経営がなされる会社であるけれども，同時にそれは社会の信託に応える責務を有しているので，その富の生成と投資の内容に関して情報を開示し，社会の評価を仰ぐことが求められる．著者は，スミスからマルクスまでの「本流」の経済思想史の方向性を，「富の所有者が主役の経済」から「富を活用する知識と意欲を持った現場の人達が主役の経済」への流れとして位置づけ，またこれこそスミスの条件回復へ向けた方向性だと喝破するのである．

第五章ではハイエク，第六章ではフリードマンが描かれている．ただし両者とも，著者によって経済思想史の「本流」とは位置づけられていない．著者は言う．「ハイエクは自由競争の精神を守ろうとする面ではスミスの素晴らしい後継者と言えるのだが，そのために私有財産権の保障という時代遅れの方法を

とった面において，時代状況に合わせてスミスの条件を回復するという本流には位置づけられない」と．フリードマンに至っては，その主張を「市場主義」とした上で，「はっきり言って薄っぺらい思想である」と辛辣な評価を下している．フリードマンの「薄っぺらい市場主義」は，「『政府介入主義』という薄っぺらい思想がもたらした行き過ぎに対する批判」であり，それ自体に意味がないわけではないけれども，それは「時代の文脈も，経済と倫理の関係性も，そしてスミスのなかにある資本主義の道徳的条件にも無頓着」であり，スミスの精神の真の継承者とは到底言えない．これが著者によって，フリードマンが経済思想史の「本流」に位置づけられないとする理由である．

第七章では，これまでの経済思想史の到達点として，現代の「組織の経済学」における株主の位置づけが明らかにされる．そこでは，株主主権は絶対的命題ではない一方，従業員組織に会社の支配権を委ねることにも問題がある．そこで，現代の経済理論における暫定的な結論は「一応の株主主権」となる．ただ，「一応の株主主権」においても，「企業の社会的責任が，ほんとうの意味での社会に対する責任にはなりきれない」という限界を抱えている．それゆえ，著者はそこから「先に動くだろうと予想する」．なぜならその先にあるものこそ，これまで検討してきた「経済学の歴史が指し示す方向の素直な延長」だからである．結論として著者は「スミスからはじまった経済学は，スミスに戻る」という．すなわち，スミスは国を豊かにするための両輪として「庶民の努力」と「見えざる手」を提起したけれども，結局のところ，「見えざる手」の暴走を抑えつつ「庶民の努力」を引き出すことこそ，豊かな国を作り出す王道だということである．

3. 本書の主な特徴と若干の私見

本書の大きな特徴の１つは，冒頭の部分でも紹介したように，「お金儲け」を基軸として一筋の大きなストーリーを構想した点，とりわけ，スミスからミル，マーシャルはもちろんのこと，ケインズさらにはマルクスまで同一陣営に引き入れ「本流」としている点である．一般的に，ケインズはスミスからリカード，ミル，マーシャルそしてピグーに至る（ケインズの言うところの）「古典派」を『一般理論』でもって叩きのめし，経済学に一大革命をもたらしたとみなされている．さらにマルクスに至っては，スミスの肯定した自由競争を前提とした資本主義を否定し，それとはまったく異なる体制を提起した．しかし，そのような常識とは異なり本書ではこの両者の思想を，スミスの条件を回復させるものとして位置づけ，大きな説得力をもって議論を展開している．著者の大胆な創造力や構想力そして視野の広さには驚くほかない．また，著者が「本流」をそのように位置づけた以上，現代経済のヘゲモニーを握っているハイエク，フリードマンは必然的に傍流へと追いやられている．ここには，現代において跋扈している「市場主義」に対する著者の苦々しい思いがにじみ出ているように思われる．

なお，著者はケインズに関しては，財政金融政策でマクロ経済をコントロールしようとしたとする通俗的な見方を排し，「ケインズ政策」とは富を活用する人々の活動が妨げられないようにするための（「よいお金儲け」を促進するための）一連の制度・政策であるとみなしている．たしかにケインズ政策＝財政金融政策という定式化はあまりにも表面的であり，そのような通俗化を招いた「俗流ケインズ主義」の責任は大きいであろう．しかしその一方で，政策を行う主体としての政府に対するケインズ自身のスタンスや扱いは，やはり慎重さを欠いた部分もあったと言わざるを得ないのではないであろうか．ハイエクやフリードマン，ブキャナンなどを持ち出すまでもなく，ケインズの身近にいたマーシャルもピグーも，政府の意義と役割は認めつつも，その危険性や恣意性を十分に理解し，政府介入拡大に対しては程度の差こそあれ，一貫して慎重な姿勢を崩さなかったのである．

さて，本書の２つ目の特徴は，ただ単に経

済思想史の内容や流れを説明して終わりということではなく，現代的な課題を的確に射程に収めつつ，思想史から明らかにされる方向性を踏まえた上で，未来における解決策や資本主義のあり方を展望している点である．とりわけ現代経済における大きな困難は，「金融」の暴走，そしてその「生みの親」とでも言うべき「市場主義」の跋扈であろう．

20 世紀の後半以降，マネーが儲けを求めてグローバルに移動し，国や地域を蹂躙するようになった．大企業も株主主権のもと目先の利益を優先し，労働者の賃金アップよりも内部留保に励み，非正規雇用は体よく使い捨てにされている．社会には金銭至上主義がはびこり，効率性や生産性が声高に叫ばれ，そこから脱落した者に対しては自己責任論が幅を利かせ，貧困・格差拡大が社会を覆いつくす．そのような中，政策としては一人ひとりの潜在能力や個性を，時間をかけて地道に開発していくという方向性よりも，手っ取り早くマクロ的な財政金融政策を発動させ，またオリンピックや万博などのビックイベントを誘致して一時的に活性化している“雰囲気”を作り出すような方向性が選ばれる．そして，政府債務は累積し，子どもや若者，将来世代の機会は奪われていく．このような状況は，まさに著者の憂慮する「悪いお金儲け」そのものであり，スミスの曲解・悪用以外のなにものでもないであろう．このような現実の悪い流れを断ち切るべく，著者は，深遠なる思想史の側面から現代的課題に切り込んで問題提起し，未来のあるべき経済像を指し示そうとしたのである．その大きな勇気と挑戦に心から敬意を表したい．

これからの近未来において，人口減少や少子高齢化は当然のこととして，いわゆる GAFA などビッグデータを握った巨大企業のさらなる躍進，AI 技術のさらなる進展，それらに伴う雇用不安やさらなる格差の拡大等々，対応を一歩間違えば破局に至りかねない切実な課題が目前に迫っている．あらゆる人々が知性と良心をはたらかせ，また協調・協働を図らなければ，この難局を乗り切っていくことは困難であろう．スミスをはじめとする「本流」の経済学者達が指し示したように，個々の人々（庶民）や地域に焦点を当て，潜在能力を引き出すための地道な能力開発が今こそ求められている．その意味においても，本書を読むことで，経済思想史の流れと内容を学び，現代経済の立ち位置を確認し，来たるべき激動の時代へ向けて正しい人間性や判断力・行動力を養っていくことの意義は，誠に大きいと言えよう．老若男女，経済学の初学者から専門家まで，さらにはサラリーマンや公務員から企業経営者に至るまで，すべての人に本書の一読を強く薦めたいが，とりわけ，これからの時代を担う若者達にぜひとも読んでもらいたい．